

1-99-51 高岡市末広町料理旅館・宮野梅松園関係資料リスト(15件19点)

No.	資料名称	点数	年代	寸法 (cm)	備考
1	たかおかちほんすぎ もくちよう 高岡七本杉 木彫 さいしきてんぐりゆうぞう 彩色天狗立像	1	明治後～ 昭和初期頃	高さ約33cm	天狗像は鼻が高いが、肌は赤くなく、翼はない。また、山伏のような装束ではなく、膝丈まであるゆったりとした白い着物を着ており、頭襟も被っておらず、高下駄は二本歯である。左手に緑色の羽団扇を持っているが、これも5枚羽であり、一般的なものよりも羽根の数が少なくなっているなど、一般的な天狗のイメージとは異なった像容を呈している。朱塗厨子内に固定して納められている。 かつて高岡駅前（末広町39の現SMBC日興証券高岡支店の前）に立っていた巨木 七本杉の遺材で作られた御神体（作者不明）。
2	朱塗厨子	1	明治後～ 昭和初期頃	幅20.2*奥行18.8* 高さ53.4	七本杉の遺材で作られた朱漆塗の厨子。扉は観音開きで、中に天狗立像が固定して安置され、七本杉の遺材で作られた祠に納められていた。
3	しょういちいなり だいしんじ 正一位稲荷大神璽	1	明治後～ 昭和初期頃	本体箱：幅9.8*奥行6.9* 高さ19.5 全体：幅14.0*奥行10.5* 高さ23.4	稲荷大神の御神体。七本杉の遺材で作られた祠に納められていた。 構造は外側から、稲や宝珠、鍵が描かれ「正一位稲荷大神璽」と刺繍された赤い布製のカバー、底が分離する木箱、小さな鏡（取り外し不可）が納められた木箱、となっている。 稲荷大神の御分霊である神璽（おみたま）を授かり、守護神として祀ることを稲荷勧請というため、おそらく稲荷神社（京都の伏見稲荷大社）から授かったものと思われる。
4	祠	1	明治後～ 昭和初期頃	幅79.0*奥行50.9* 高さ92.4 台座大：幅68.1*奥行 45.4*高さ25.7 台座小：幅69.8*奥行 46.3*高さ8.1	七本杉の遺材で作られた祠。同じく七本杉の遺材で作られた大小2点の台座の上に祠が乗せられている。向かって左に天狗立像が入った厨子、その右横に南無妙法蓮華經の置物（付属品）、中央の仕切りの右側に正一位稲荷大神璽が納められていた。 正面には木彫の装飾が施されており、上部中央には天狗の羽団扇紋が彫られている。また、両開き戸の向かって左の扉には天狗の羽団扇紋が付いており、右の扉には抱き稲紋が付いている。
5	写真（高岡七本杉 天狗像・稲荷神を 祀る宮野家祭壇）	1	昭和7～18年 (1932～43)頃	本紙：縦19.8*横14.4 全体：縦31.3*横24.3	天狗像などが納められた祠と、鏡や瓶子、餅や果物などが供えられた祭壇の様子が写っている。 祠の上部には、天狗の羽団扇と稲の紋が入り「昭和七年八月」の文字が書かれた幕が写っている。また向かって左側に、上部に天狗の羽団扇が描かれ、「高岡／妙法講」と書かれた会旗が掲げられている（妙法講は日蓮宗）。 写真の台紙には「Seibido／高岡 倉田」（御旅屋通りにあった倉田精美堂）の文字が入っている。 かつて高岡市末広町にあった料理旅館 宮野梅松園内で撮影された写真。
6	銅鏡	1	江戸時代	鏡：直径17.5 全体：幅25.9* 奥行14.4*高さ35.6	銅器の鏡（柄鏡カ）。裏面には鶴と亀や松の図に「高砂／中原撰津守」の文字が陽鑄されている（他の類例で、近世の銅製柄鏡にこの名がある。中には「藤原光重」と続く例もある）。木製の台座（雲の彫刻あり）に嵌め込まれている（取り外し不可）。
7	金属製瓶子（一 対）	2		各 径12.0*高さ21.6* 口径4.3	金属製の御神酒入れ。1対で蓋付き。どちらにも右読みで「奉納」の文字が刻まれている。また、下部には「西村花枝／滝内たつ／宮野彌一郎」、「渡部カツ／吉池キヨシ／大町菊枝」とそれぞれ刻まれている。 宮野彌一郎(1887～1937)は、梅松園2代目。1894年、一平の養子（草島村（現富山市）守山真太郎の子）となり、一平の死去（1912年1月21日）と同日に家督相続。だが、同年3月7日、一平の子・保一に代を譲り隠居した。 他の名前は不明。
8	三方	2		各 幅21.0*奥行20.7* 高さ17.4 付属の台：各 縦19.7* 横19.4*高さ2.7	折敷の上に乗せる台がそれぞれ付属している。

No.	資料名称	点数	年代	寸法 (cm)	備考
9	祭壇	2		大：幅69.0*奥行11.5* 高さ29.5 小：幅36.3*奥行19.5* 高さ20.7	2台あり、ここでは天板が細長い方を「大」とした。
10	梅松園看板 (守田宝丹書)	1	明治後期～大正元年(1912)	縦49.7*横157.7* 厚さ2.6	かつて高岡市末広町にあった料理旅館 宮野梅松園で使用されていた木製看板。右読みで「椽口(公の下に木)園」、「旭陵写口長禄酔書口」と彫り金箔が押されており、印章も彫刻で入れられている。 引首印(白文長方印)「静松朝陽」、白文方印「宝丹樓/主人守/田孝印」、朱文方印「和(餼)天/不斎」(読み順不明)。 上部中央に吊り下げ用のヒートンが付けられている。 守田宝丹(1841～1912)は江戸上野の売薬商(9代目)、東京市会議員、書家。1862年、新薬「宝丹」を製造発売して財を成す。宝丹流と称する書も得意とし、商家の看板に珍重された。名は治兵衛、祐孝。字は維則。号は宝丹の他に長禄、静松園、丹正、卍、芳譚、長寿翁など。
11	漆塗梅松園文菓子器	1		径12.0*高さ11.6	蓋付の漆塗菓子器。胴に梅の図・松の図・漢字の「園」が描かれており、「梅松園」と読めるデザインになっている。内側は朱漆塗。 蓋に輪状のつまみが付いており、全体としては鈴のような形をしている。
12	当座帳	2	昭和初期	大：縦18.6*横12.9* 厚さ5.5 小：縦18.3*横12.9* 厚さ4.8	各表紙墨書「昭和 年/当座帳/ 月 日」、裏表紙墨書「梅松園」。 いずれも未使用で、本文用紙が紙紐で縛られている。
13	前田利定筆扇面和歌書「高岡にて」	1	明治後期～昭和前期	本紙：縦15.0*横48.8 全体：縦123.3*横53.5 軸長：59.3	上部に鶴が連なって飛ぶ絵が入った扇面に、和歌が書かれている。「高岡にて/利定」「遠つみおや/しづまり/います/はかどごろ/思ひ出/ふかし/ちとせ/老松」。 前田利定(1874～1944)は、加賀前田家の支藩・旧七七日市藩主 前田利昭の長男。七日市藩は現在の群馬県富岡市七日市で、初代藩主は前田利家の五男 前田利孝。 軸装。共箱あり。
14	漢詩書「題七福神之図」	1		本紙：縦136.9*横33.9 全体：縦193.9*横45.8 軸長：51.3	引首印(白文長方印)「非口非口」、墨書「題七福神三図 為/梅松園主人嘱 蔚山野人謹写」、朱文方印「江公口/今間者/復主人」、白文方印「源斎」。 軸装。巻紙に「梅松園為書」と書かれている。 表装の折れ、剥がれ、破れがひどく、軸木も取れかけている。
15	松竹に寿老人図重掛け	1		縦76.1*横72.6	鹿を従えた寿老人の図が刺繍で施された重掛け。四隅に白色の房が付いている。
付属品	南無妙法蓮華経置物	1		幅2.7*奥行1.4* 高さ9.3	「南無妙法蓮華経」の文字が刻まれた透明の置物。七本杉の遺材で作られた祠(No.4)に納められていた。

・他に前田利常書状2幅も寄贈されたが、別に登録した(1-01-294)。

※高岡を代表する料理旅館であった宮野梅松園は、明治後期に初代 宮野一平(?～1912)が末広町40番地に創業し、2代彌一郎(1887～1937)を経て3代保一(1885～1977)が昭和17～18年頃まで営業していた(寄贈者は4代)。なお、宮野氏の先祖は藩の足輕であったと伝わっており、宮野梅松園が営業していた土地は高岡町奉行 伊藤内膳(1594～1669)の屋敷地であり、のち御旅屋の庭園となったという。

※寄贈者が先祖から聞いた話によると、明治27年(1894)9月頃、暴風により七本杉の7本の幹のうち5本が折れてしまった。この折れた5本の遺材を宮野家の納屋で保管し続けていたところ、保一の夢枕に「七本杉の遺材を使って、富山の仏壇または彫刻師に天狗の像を作ってもらえ」とのお告げがあり、天狗像や厨子、祠、台座などを作成して(作者不明)家で祀っていたとのこと。なお、古来より七本杉には神霊や天狗がいるともいわれ、ご神木ともされていたが、枯れて倒潰のおそれが出てきたうえ、交通や商店街拡張の妨げともなってきたので、昭和2年(1927)11月に伐採された。

※この祠の祭祀は正式には「妙法講」(保一妻みすいが日蓮宗のお経を唱えていた)といったが、「高神様(たかがみさま)」と通称され、毎月1日に行われていたという。ちなみに、宮野家の菩提寺は博労町の極楽寺(浄土宗)である。また祠内の稲荷神霊は天狗と直接関係は無いと思われ、保一、または妻みすいの個人的信仰により勧請されたと思われる。極楽寺境内には「八ノ宮稲荷大明神」が鎮座していることに関わりがあるかもしれないと寄贈者は語っている。